

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏 名 長坂契那 君

論文題名 観光をめぐる近代日本の表象に関する歴史社会学的研究
—探検紀行から旅行ガイドブックへ—

審査担当者

主 査 慶應義塾大学名誉教授・元大学院社会学研究科委員
文学博士

鈴木 正崇

副 査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
文学修士

浜 日出夫

副 査 慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員
博士（社会学）

有末 賢

本論文は日本に関して英文で書かれた外国人用の旅行ガイドブックを考察対象として、その系譜を「探検紀行から旅行ガイドブックへ」と仮定し、観光という文脈で近代日本の表象がどのように形成され、「まなざし」の交錯によって変化してきたかを歴史社会学の立場から明らかにした。観光をめぐる近代日本の表象については、従来看過されてきた国家レベルのマクロな位相を対象としており、ユニークで優れた研究になっている。内容は以下のとおりである。

序章 観光をめぐる表象に関する歴史社会学的アプローチ

- 1 本研究の目的と背景
- 2 「観光のまなざし」を経由した観光をめぐる表象研究の動向
 - 2-1 「観光のまなざし」以前 海外の研究者を中心に
 - 2-2 「観光のまなざし」
 - 2-3 「観光のまなざし」以後
- 3 研究の視点 明治期以降の博覧会研究の推移
- 4 課題と方法 観光をめぐる歴史社会学的アプローチ
- 5 分析対象 探検紀行から旅行ガイドブックへ
 - 5-1 分析対象としての「旅行ガイドブック」
 - 5-2 探検紀行から旅行ガイドブックへ
 - 5-3 本研究で使用する資料
- 6 本研究の構成

第一章 最初期の外国人向け旅行ガイドブック

- 1 はじめに
- 2 旅行ガイドブックとは
- 3 「優れたガイド」
- 4 対象読者の質の変化 居住者から旅行者へ
- 5 旅行ガイドブック再考

第二章 探検紀行から旅行ガイドブックへ

- 1 はじめに
 - 1-1 HTJ の出版の歓迎
 - 1-2 先行研究
- 2 初版 旅行ガイドブックの成立
- 3 第二版 「安全な探検」
 - 3-1 探検の内容
 - 3-2 外国人内地旅行権
- 4 第三版、第四版、第五版 サトウからチェンバレンへの交代劇
- 5 第七版、第八版、第九版 「オールド・ジャパン」
- 6 オリエンタリストとしてのチェンバレンと HTJ
- 7 類書の横行と「オールド・ジャパン」の読み換え
- 8 おわりに 旅行ガイドブックと「オールド・ジャパン」

第三章 公式案内の誕生

- 1 はじめに
- 2 鉄道院の OGEA 製作の意図
- 3 OGEA 製作の政治的背景
- 4 ジャパン・ツーリスト・ビューローの設立
- 5 おわりに 政治と観光、そして国民国家

第四章 公式案内の展開

- 1 はじめに
- 2 興味の対象としての「ゲイシャ」
- 3 資料としての旅行ガイドブックの書誌学的情報
 - 3-1 先行研究
 - 3-2 TGJE と著者のテリーについて
 - 3-3 TGJE が「見たいもの」

- 3-4 OGEAが「見せたいもの」
- 3-5 OGJが「見せたいもの」
- 4 「見たいもの」と「見せたいもの」から垣間見られる日本の表象
 - 4-2 古き良き日本の担い手としてのゲイシャ
 - 4-3 吉原の描写
 - 4-4 日本旅行で無視できないゲイシャの存在
- 5 おわりに 「見たいもの」と「見せたいもの」の狭間で揺れるゲイシャ

第五章 公式案内の自己表象

- 1 はじめに
- 2 本章で扱う資料
 - 2-1 1941年版
 - 2-2 1952年版、1958年版
 - 2-3 1966年版
 - 2-4 1975年版
 - 2-5 1991年版
- 3 天皇の存在とそれをめぐる歴史記述
 - 3-1 天皇の存在
 - 3-2 歴史記述
- 4 皇居の記述の変遷
- 5 おわりに 「公式案内」による平和のイデオロギー

終章

- 1 本研究の要約
- 2 考察
 - 2-1 まなざしと表象の力学
 - 2-2 「古き良き日本」の呪縛
- 3 結語

序章の「観光をめぐる表象に関する歴史社会的アプローチ」では、本論文の理論的枠組みと問題意識を述べる。理論的には観光を消費社会の変動の中に位置づけたジョン・アーリ『観光のまなざし』(1990)を出発点とした。「観光のまなざし」とは、ある場所に対するイメージを、視覚的に対象化し、把握・補強・再生産を繰り返すという循環性に注目した考察である。観光は資本主義の発展に伴う「まなざし」による場所の消費として捉えられる。アーリは『観光のまなざし 3.0』(2011)では観光は体験世界の相互作用で、「身体化された社会的実践で、視覚を超えた感覚」であると指摘した。観光は文化の変容に止まらず、多様な形や要素に変化していく過程であると捉えられる。

本論文はアーリの議論を踏まえつつ、観光をめぐる表象や言説を検討し、西欧を中心とするまなざしが、国民国家形成、周縁と中心の構図、植民地政治、オリエンタリズムなどに展開する状況を明確化し、観光の表象の政治性に焦点を合わせた考察を展開した。海外からの日本へのまなざし、それを受けた日本の自己表象といったまなざしの双方向性による重層性が、どのように形成され外客誘致に利用されたのかを文書資料を用いて検討する。

本研究の研究対象は英語で作成された外国人向け旅行ガイドブックである。歴史社会学的な系譜を、「探検紀行」から「旅行ガイドブック」へと仮定して、紀行が与えた影響が、観光の文脈に集約され、日本の表象がどのように形成され、まなざしの交錯で変化してきたのかを明らかにした。先行研究との関連では、観光研究のゲスト・ホストの関係性を越えて、ホストも研究対象に含めて拡大して考察したと言える。研究方法の根幹は歴史に対して社会学の概念図式や社会学理論を強く意識して適用する歴史社会学である。

本論文は観光を国家間や対国際社会というマクロのレベルで捉えることも目的としている。観光のまなざしをミクロな個人の身体に限定せず、国家間というマクロレベルの表象をめぐる問題に転換した。併せて博覧会を観光と接合させる研究も援用した。

第一章の「最初期の外国人向け旅行ガイドブック」では、幕末期から明治中期までの外国人向けの旅行ガイドブックを検討した。その内容は日本に商用・宣教・教育などの目的で短期滞在ないし居住する外国人のために、日本到達までの船舶情報を充実させて提供し、開港地や外国人の立ち入りを許可された土地を単独に扱った範囲の狭い案内である。最も古い英文の旅行ガイドブックはデニス『中国・日本開港地案内』(1867年・慶應3)、次いで山本覚馬編『京都とその周辺名所案内』(1873年・明治6)である。前者は開港地限定の案内、後者は京都で1872年に開催された日本初の博覧会に併せての案内で、外国人にとって安全かつ最低限の生活レベルを保証できる情報が掲載されている。グリフィス『横浜案内』『東京案内』(1874年・明治7)、アーネスト・サトウ『日光案内』(1875年・明治8)、キーリング『旅行者のための横浜・東京案内』(1880年・明治13)などが続く。1880年代に日本が世界一周旅行の寄港地に組み入れられ、ある程度の範囲の国内旅行が可能になると、横浜から東海道で大阪、京都へ、そして神戸で出港というルートが確立し、旅行者の動線が点から線へと変化していく過程が読み取れる。ここで明確になったことは、19世紀後半の「旅行の大衆化」と、中流階級に爆発的に普及したマス・ツーリズムの成立は、外国人の日本旅行の始まりとは重ならないという点である。当時の旅行ガイドブックの検討から、安価なマス・ツーリズムに逆らって、知識人、上流階級、商人たちが個人で豪華な旅行をしていたという事実が浮かび上がる。本章では外国人向け旅行ガイドブックから、欧米の富裕層や知識人の文化圏に、日本が存在を徐々に認知されていく過程を読み解いた。

第二章の「探検紀行から旅行ガイドブックへ」では、本格的な旅行ガイドブックの成立過程を情報源としての探検紀行とからめて検討する。1881年(明治14)『旅行者のための中日本・北日本旅行案内』A Handbook for Travellers in Central & Northern Japanが横浜のケリー社から出版された。二版以後は、イギリスのジョン・マレー社 John Murray が

引き継ぎ、『旅行者のための日本旅行案内』A Handbook for Travellers in Japan と題した旅行ガイドブックを 1884 年（明治 17）から 1913 年（大正 2）まで約 30 年間、九版まで出版した（以下 HTJ）。ジョン・マレー社は、19 世紀後半に欧米で一世を風靡したイギリスの旅行ガイド出版社で、1836 年に専門的知識と地図を掲載した簡易な旅行ガイドブックを発行し、インドや日本などアジアの旅行ガイドブックの出版にも乗り出した。HTJ 全九版のうち、初版と第二版の編集者は外交官のアーネスト・サトウとホーズ、第三版から第九版まではチェンバレンとメイソンであった。サトウとチェンバレンは外国人による日本学の始祖とされる重要人物で、現代でも評価が高い。彼らは HTJ の執筆にあたり、1878 年（明治 11）に日本国内を旅したイザベラ・バードと情報交換を行った。バードの『日本奥地紀行』Unbeaten Tracks in Japan, 1880（ジョン・マレー社刊）は、HTJ の製作に大きな影響を与えた。日本での異文化体験を記述した探検紀行は、調査・分析が加わって日本学の展開に寄与し、旅行ガイドブックへと集約されていった。ただし、その底流にはオリエンタリズムの視点があった。HTJ のキーワードの「オールド・ジャパン」old Japan は、開国・維新後、間もない若き日本の姿への懐かしさをオリエンタリズムのまなざしで表象する言説であった。HTJ の刊行以後、模倣、剽窃、引用する類書が横行し、その中には日本が外国人旅行者を接待する喜賓会（welcome society 1893 年設立。ジャパン・ツーリスト・ビューロー1912 年設立の前身）のガイドブックも含まれる。オリエンタリズムのまなざしは外国人誘致として逆用して活用されたのである。「オールド・ジャパン」は日本の原風景への賞賛として読み換えられ、現代に至るまでの日本観光をめぐる表象の根幹となった。この時期は、欧米のオリエンタリズム的なまなざしを巧みに肯定的に読み換えた転換点であり、旅行ガイドブックはその媒体として大きな役割を果たしたとする。

第三章の「公式案内の誕生」では、HTJ 以後の展開を探る。ジョン・マレー社は旅行ガイドブック部門を売却して 1913 年（大正 2）の九版を最後にその姿を消した。それと入れ替わりに登場したのが、日本初の「公式案内」である『東アジア公式案内』An Official Guide to Eastern Asia 全 5 巻（1913～1917 以下 OGEA）である。OGEA は 1908 年（明治 41）に成立した鉄道院の出版で、第 1 巻「満洲・朝鮮」1913、第 2 巻「南西日本」1914、第 3 巻「北東日本」1914、第 4 巻「中国」1915、第 5 巻「東インド：フィリピン諸島、仏領インドシナ、シャム、マレー半島、蘭領東インドを含む」1917 からなる。OGEA の副題、Trans-Continental Connections between Europe and Asia には大陸進出による植民地国家日本の国民国家形成の意図の反映が顕著に見られる。この本の製作は後藤新平の企画であった。後藤新平は台湾総督府民政長官、南満州鉄道株式会社総裁を経て、帰国後に鉄道院の初代総裁となり、予算 20 万円をかけて東アジアの徹底的な調査と翻訳作業を経て、本書製作の推進者となった。西欧によって知的側面から評価された日本が、自らの旅行ガイドブックを欧米向けに作成したことは、まなざしの逆転と利用と言える。日本は日露戦争（1904～1905）の勝利で、中国大陆の足掛かりを得て植民地化を推進し、鉄道網を整備した。OGEA の目的は外貨獲得や外客誘致に止まらず、日本の国民国家形成の意図を反映してい

た。ナショナリズムの高揚を背景として日本を対外的に情報発信する観光政策の一環であった。「公式案内」official guide の名を冠した「東アジア」の旅行ガイドブックは他に類を見ない企画で、鉄道院の対外政策に対する意気込みが伝わる。OGEA は西欧による旅行ガイドブックに見られたオリエンタリズムのまなざしを反転させ、ゲストに対するホストの優位性を示し、西欧のまなざしを東アジアに向ける大日本帝国の野望を表象している。旅行ガイドブックは「国」の真正性を表象するテキストとなり、欧米中心の国際社会からのまなざしを操作し利用する政治的な道具となった。OGEA はゲストとホストの関係性を読みかえ、ホストが自己表象を公的に権威づけ自らがまなざしの主体となった。表象の受容者はまなざしを利用する主体へと変貌したのである。OGEA は観光という新たな産業と政治との結合による表象のテキストである。

第四章の「公式案内の展開」では、OGEA とほぼ同じ時期にアメリカのヒュートン・ミフリン社で出版された『テリーの日本帝国案内』Terry's Guide to Japanese Empire(1914～1933。以下 TGJE)を検討する。TGJE は旅行専門ライター、T・フィリップ・テリーのガイドブックで、初めて芸者と吉原の記述が現れる。芸者と吉原は当時の日本にとっては好ましいものとは思われていなかったが、外国人からみれば日本の魅力に映った。日本に関する基本的情報は既に HTJ によって発見され評価しつつされていたので、旅行ガイドブックは更に魅力的でエキゾチックな要素を求めて、芸者と吉原という格好の対象を発見したのである。OGEA とは別の回路でのまなざしの交錯と変容が見られたのである。ヒュートン・ミフリン社は既にラフカディオ・ハーンの『知られざる日本の面影』1884、『心』1896、『怪談』1904 を出版し、日本の審美的価値を海外に発信し、エキゾティシズムの流れを醸成していた。芸者は「公式案内」の OGEA には掲載されておらず、当時の日本にとっては外国に発信するような好ましい表象ではなかった。しかし、日本側もジャパン・ツーリスト・ビューロー(1912 開設。JTB)の設立後に製作された日本紹介の小冊子 JAPAN には三枚の「芸者踊り」の写真を掲載して説明を加えた。これ以後、外客誘致の小冊子では「伝統的な日本文化」の担い手として芸者の表象を積極的に活用するようになった。かつては知的側面から発見され評価されて展開した日本の表象は、新たなオリエンタリズムのまなざしの作用を反転させて、外国向けの情緒性を帯びたメッセージを送ることになった。

第五章の「公式案内の自己表象」では、1941 年から 1991 年まで出版された「公式案内」を検討し、まなざしの重層化によって日本の自己表象が変容し、まなざしが再生産される諸相を検討した。鉄道省国際観光局は『日本 公式案内』Japan : The Official Guide(1941)を紀元 2600 年(1940)に合わせて出版した。これは新たな「公式案内」の始まりで、戦後は運輸省観光局に引継がれ『日本 公式案内』Japan : The Official Guide が 1952 年に出版されて版を重ねた。1964 年に出版元は国際観光振興会に変わって『新公式案内 日本』The New Official Guide : Japan が出版され、1991 年まで刊行が続けられた。一連の『公式案内』の特徴のうち天皇をめぐる表象に焦点を当てて考察すると、閉鎖的で神聖性を帯びた天皇が戦後にその価値を反転して、人間性に満ちた開放的な表象に変化したことが明

らかになる。天皇は戦後民主主義の展開の中で平和の代弁者としての役割を担わされ、観光推進の基本的条件である平和の象徴として利用されるようになった。観光客を呼び込むには「平和」が条件で、戦後の天皇家は平和を象徴する存在として観光を正当化する表象になった。皇居も日本の首都を代表する観光名所としてだけではなく、天皇のイメージを具現化し提示する場となった。皇族を「見る」ことのできる観光名所としての意味づけが加わり、外国人のルポによる賛辞が旅行ガイドブックに書き加えられた。皇居は新たなオリエンタリズムの反復と交錯、欧米の外国人のまなざしと承認で新たに価値づけられた。皇居が消費の対象としての観光名所へと変貌した歴史的状況は、天皇像が軍国主義から平和主義の象徴へと変貌した過程と対応する。旅行ガイドブックは戦後日本が目指す平和を含意する歴史の変化を表象してきた。天皇と皇居は海外と日本のまなざしの相互の交錯の結果、観光を通して日本の表象として平和の文脈の中で利用されるようになった。ここにも観光と政治の結合を表象するテキストとしての旅行ガイドブックの特徴が表れている。

終章では幕末期から1990年代初頭までの旅行ガイドブックの変遷の考察によって明らかになったことを整理して提示している。本論文は近代日本の表象を旅行ガイドブックを通して考察し、政治・経済の力学に配慮した研究を目指すことを意図したという。旅行ガイドブックの系譜は探検紀行に遡り、これを情報源として近代の観光の表象のテキストとして成立し、オリエンタリズムを読み替えつつ、最終的には政治と観光を融合して利用されるようになった。旅行ガイドブックにおける日本の表象の基調は戦前は「古き良き日本」と「近代国民国家日本」、戦後は「民主主義国家日本」の三点であると指摘する。これらの表象は、欧米と日本の双方のまなざしの交錯と反応、観光をめぐる表象の力学によって生み出され重層的に変化してきた。「古き良き日本」の表象は当初から現在に至るまで継続し、現在も日本の観光客誘致で使用されている。それは国際平和、異文化交流の名の下に、経済政策や外交政策をソフトに覆い隠し肯定的に読み換えると同時に、脱政治化を目指す意図を包含する。しかし、意図せざる表象の力学は逆に政治と文化、観光と経済を結合させて多様な展開を遂げた。旅行ガイドブックはその過程を読み解くテキストである。

本研究の評価すべき点を総合的に述べておく。本論文は旅行ガイドブックを観光の単なる情報源ではなく、観光をめぐる近代の表象を読み解くテキストとして扱ったことに獨創性を見出せる。旅行ガイドブック研究の学術的な価値を再発見し、テキストの可能性を拡張して、観光学・観光社会学・歴史社会学の新たな方向性を指し示したパイオニアワークと言える。政治、経済、社会、文化の要因が複雑に絡む表象の力学の変遷や表象の系譜を辿ることは異文化理解に繋がる。本論文は文化人類学にも大きな成果を齎したと言える。

評価すべき点を個別に列挙すれば、①先行研究が少ない「旅行ガイドブック」の研究に挑んだパイオニアワークである。②日本に関する英文の「旅行ガイドブック」を近代の表象として読み解く斬新さがある。③日本が作成した英文による「公式案内」の植民地表象と権力の介在の考察が際立つ。④「旅行ガイドブック」が探検紀行を組み替えて成立した状況を歴史的に跡付けた。⑤西欧と日本の双方向的な「まなざし」の交錯による表象の変

化を詳細に考察した。⑥資料に関しては、現物を見て詳細に検討しており実証性が高い。⑦観光の政治的側面を歴史的に明かし、ホスト・ゲスト論を越える視点を導入した。⑧「まなざされる」負の表象（芸者等）を通じての日本文化の再定義の可能性を示唆した。⑨「旅行ガイドブック」の中のキーワードを選択することで各テキストの特徴を明示した。⑩各章を繋ぐ整合性や一貫性を構築しようとする強い意志がある。⑪研究対象を固定させて理論と資料解釈を一致させている。⑫文脈の異なる資料を「観光をめぐる表象」として統一的に把握する視点を確立した。⑬社会学者が提示するマクロ・インタラクショニズムの具体的考察として優れている。⑭ベネディクト・アンダーソンのネイションの形成の議論に旅行ガイドブックを加えるという新しい視点が提示されたこと、が挙げられる。

ただし、本論文には幾つかの課題がある。第一は理論枠組みの問題で、ジョン・アーリのまなざし論はマス・ツーリズム時代の観点を内包し、英語圏からの発想に基づいている点を考慮する必要がある。本論文で重視する「古き良き日本」のまなざしは、英語表現の *the good old days* と対応し、英国を元祖とする旅行ガイドブックに当初から組み込まれていた常套表現とも言える。この点では英語以外の言語で書かれた旅行ガイドブックを広く比較して再検討する余地が残されている。第二はまなざしには「見たいもの」「見せたいもの」「見せたくないもの」が交錯しており、日本の表象として、天皇や芸者が登場する場合は、差別や被差別など別の次元の考察が必要で、エキゾティシズム *exoticism* や平和の象徴として単純化できない複雑な歴史性がある。第三は「旅行ガイドブック」の主題の変遷過程がやや単純化されていることである。「古きよき日本」→「近代国民国家」→「民主主義国家日本」という自己表象の自覚化の流れには曲折がある。また、戦後の「公式案内」は戦前に比べると地位が低下し、「公式案内」だけで考察することには無理が生じている。戦後の天皇や皇居を「平和」の表象へと収斂させる議論は不十分で、今後の更なる考察が必要である。第四は理論に関わることで、西欧と日本の「帝国のまなざし」「帝国の知」の共犯関係という見方を導入すれば新たな展望が開ける。オリエンタリズムとオキシデンタリズムの拮抗、オリエンタリズムのアジアへの逆照射という視点が必要であり、コロニアル、ポストコロニアルの視点をより強く出して考察すべきではないかと思われる。「探検紀行から旅行ガイドブックへ」という副題はここで生きる。第五は今後の課題としてのジョン・マレー社への注目である。同社は生物学・人類学の分野でダーウィン『種の起源』1859、タイラー『未開文化』1871 を出版し、探検紀行ではフランクリン『北極海探検記』1823、リヴィングストン『南アフリカにおける宣教師の旅と探検』1857、ヤングハズバンド『大陸の中核』1896 などを刊行した。探検紀行と旅行ガイドブックと学問はイギリスで融合し植民地化と表裏一体であった。本研究は19世紀のヴィクトリア時代に出現した未開と文明を結合する出版文化という文明史の転換の日本への展開と見る事が出来る。

本論文は以上のような課題を残しているが、「旅行ガイドブック」を研究対象とするというユニークな観点を設定して、歴史社会学の立場から近代日本の表象の変遷と観光の考察に挑んだ独創的な業績として、博士（社会学）学位の授与に値するものと判断する。